



新春スペシャル 「南水ひとり語り」



熊澤 南水(くまざわ・なんすい)

今や“ひとり語り”の名手として全国からお呼びのかかる南水さん。同じ市川三丁目のよしみで、教会献堂記念の初回から、毎年1月恒例となって9回目を迎えます。今回はお茶のひと時を間に挟んで、以下の演目となります。

〈第一部〉

朗読:若竹千佐子作

『おらおらでひとりいぐも』(60分)

～休憩・お茶の時間～

〈第二部〉

語り:樋口一葉作『大つごもり』(35分)

若竹千佐子(わかたけ・ちさこ)1954年、岩手県遠野市に生まれる。現在、千葉県木更津市在住(64歳)。岩手県立釜石南高等学校を経て、岩手大学教育学部卒業。卒業後は臨時教員を経て専業主婦となる。55歳の時に夫に先立たれ、長男からの勧めをきっかけに元「海燕」編集長の根本昌夫が講師を務める早稲田大学エクステンションセンターの小説講座に通い始める。2017年、『おらおらでひとりいぐも』で第54回文藝賞を史上最年長で受賞しデビュー。2018年、同作品で第158回芥川賞を受賞。黒田夏子に次いで芥川賞史上2番目の高齢受賞となった。受賞作のタイトルは、宮沢賢治の詩「永訣の朝」の一節からとられている。同時受賞の石井遊佳も、根本昌夫が講師を務める別の小説教室の受講生であった。

樋口一葉(ひぐち・いちよう)1872～96年:本名・奈津(なつ)。東京麹町に生まれた。幼少より読書を好み、中島歌子に和歌を学んだが、父の死後、家計を支えるために、同門の姉弟子・三宅花圃(かほ)の『藪の鶯』(やぶのうぐいす)に刺激されて作家を志した。また大衆作家・半井(なからい)桃水に小説作法を師事し、北村透谷ら〈文学界〉の人たちとも交わった。貧しい下町の庶民生活の悲哀や女性の悲劇を叙情的な擬古文でつづり、当時の才女として「今紫」「今清少」と呼ばれた。『大つごもり』(1894)『たけくらべ』『にぎりえ』『十三夜』(1895)などの佳作を残し、結核により25歳の若さで世を去った。



日 時 : 2019年1月20日(日)

2:00pm～(開場=1:30)【時間厳守】

入場料 : 1,000円 (飲み物・お菓子付き)

定 員 : 90名お申し込みはお早めに!

場 所 : 聖望キリスト教会

〒272-0034 市川市市川 3-37-12

Tel&Fax:047-321-3343(大竹)